人権だより No.297(2022.12)

映画「手紙」の紹介

保健体育科　桑原 昌文

私が以前勤務していた学校での人権学習の一環で、映画「手紙」を視聴しました。映画好きの人権担当者である同僚の先生がチョイスした作品でした。映画「手紙」は、犯罪者差別が題材です。犯罪の加害者と被害者、そして、その家族がどのような思いを抱えているのか。さまざまな人権問題は、どれもこれも自分自身が当事者として加害者や被害者となり得るし、犯罪者差別も自分事です。私は、映画「手紙」の視聴機会によって、犯罪者差別という人権問題に出会いました。さて、映画「手紙」のあらすじを説明します。

武島直貴と武島剛志の兄弟は、幼くして両親を亡くし、兄の剛志が親代わりをしながらの生活を送ります。剛志は弟の直貴のために高校進学をあきらめて中学校を卒業したら仕事につき、直貴にふびんな思いをさせてはいけないとの責任感から寝る間を惜しんで仕事に励みます。高校3年生になった直貴は大学進学を目指すようになりました。ちょうどその頃に大事件が起こってしまいます。この事件をきっかけにして、歯車が狂い・・・。兄弟の関係も引き裂かれていきます・・・。直貴は大学進学をあきらめ、高校卒業後に就職しましたが、兄の起こした事件により、誹謗中傷を受けることになり、仕事を転々とします。映画はめまぐるしく場面を変えながら展開していきます・・・。

私たちは、いつどのように加害者や被害者となってしまうか分かりません。皆さんご存じのとおり、桑原は体育教師です。体育の授業を毎日行い、放課後は陸上競技部の監督を務める日々です。体育や部活動にも危険がいっぱいあります。真剣に授業を受けている場合にも事故は起きてしまうかもしれません。フルスイングのバットが折れて飛んで行ったのが誰かに当たって大けがとなる。鋭い打球に対応できなかった守備者が大けがをする。送球が乱れ、ベンチにボールが飛んで行ったのが当たってしまい大けがとなる。どのケースにおいても万が一には死亡事故につながることは否めません。悪意がなかったとしても、社会的責任が問われ、不運な場合には誰かの命を奪ってしまうこともあるかもしれません。

最後に、罪を犯した人が出所し社会生活を送ることに「犯罪者」というレッテルを貼り続けることをあなたはどう考えますか。犯罪者は怖い、信じられないと思ってついつい距離をとってしまうかもしれません。このような心理と態度が犯罪者を孤立させ、再犯へと結びつけてしまうことが日本では多いようです。再犯の恐ろしさは再び被害者が出てしまうということです。犯罪の加害者にはしっかりと罪を償ってもらい、出所後は私たちが温かく迎え入れて、再犯が起こらないように共に暮らしていくことが大切だと感じませんか。ともあれ、時間がありましたら映画「手紙」は素晴らしい映画ですので、ぜひご覧ください。

【保護者の声】 文章を読んだ PTA 人権委員の方の感想です。

罪によっては被害者・加害者の両家族に一生ついて回るつらい過去になります。彼らが孤立しないよう、地域社会全体で見守り支援を続ける必要があると思います。また出所後に仕事や住居がない場合に再犯率が高くなるという記事を読んだことがあります。出所後の支援の強化も大事なのだと思います。（2年生保護者）

私たちは確かに、普段と変わらない生活の中で、いつどこで加害者や被害者になるか分かりません。自分自身だけでなく、身近である家族に対してもそう言えます。映画「手紙」の内容は、他人事ではなく犯罪者差別という問題について向き合う良い機会だと思うので、親子で鑑賞してみたいと思いました。（2年生保護者）

【人権委員の声】

犯罪者は怖い、危ないという思い込みが犯罪者の差別へと結びついてしまうことを知って、とても驚きました。犯罪者も私たちと同じ人間で、気持ちも変わるので、「犯罪者」というレッテルを張り続けずに、みんなで協力していけたらいいなと思いました。罪を償って出所した犯罪者はもちろん、その家族などを誹謗中傷したりせず、再犯が起こらないようみんなでサポートする必要があると感じました。（3年生　人権委員）

よくテレビのニュースなどで、犯罪者の顔や名前が出されていますが、私もその人に怖いという感情が先に出て、距離をとると思います。知らないうちに「犯罪者」というレッテルを貼り続けて、孤立させてしまうことがないように、それに気付いて温かく迎え入れられる人が増えるといいなと思いました。（4年生　人権委員）

気付かないうちに「犯罪者」というレッテルを貼って差別をしていたかもしれないことに、はっとさせられました。差別はよくないと常日頃から教わっているはずなのに、まだまだ意識が足りないと痛感しました。同じ人間である以上、差別というのは絶対にあってはいけないものという考えを、今一度再認識し、行動していきたいです。（5年生　人権委員）

私は桑原先生の文章を読んで、深く考えさせられました。自分の身の回りの人に罪を犯した人がいるかもしれないと考えたことがなかったからです。もし、自分や家族が罪を犯した人と関わっていると知ったとき、自分がどんな態度をとってしまうかは分かりません。しかし、「犯罪者」というレッテルを貼り続け、差別することは間違っていると思いました。（6年生　人権委員）